

NNNドキュメンタリー

『夢を刈られて 大潟村・モデル農村の40年』

を制作して



大潟村・秋の夕暮れ

石黒 修(ABS)
〈プロデューサー〉

みんがひ
語り
ろう
民放史

題字 中川 順

食糧不足解消のため国が八郎潟を干拓して広大な農地を生んだ秋田県の大潟村。今回の『民放史』は、このモデル農村と謳われた村でこの40年に何が起きていたのかを淡々と描き、ギョラクシュー賞テレビ部門大賞を受賞した石黒修さんの《現場からの発言》です。

農業県・秋田に生まれて

1年の季節の中で、私は秋が一番好きだ。自宅から自転車です3分ほど走ると広がる大きな田んぼ。

黄金色の稲がざわざわと風にそよぐたびに、稲が擦れて焦げたような香りが田舎の一本道を包む。とれたての新米は本当においしい。

特にあきたこまちという品種は食感がもち米に近いのだが、新米は粒の外側がしっかりとしているため特に弾力がある。噛みしめるたびに口の中に広がるほんのりとした甘さと、鼻に抜ける稲の香り。

秋田で暮らすからこそ味わうことが出来る幸せだ。

小学校の頃、社会科の授業で秋田に大潟村という場所があることを習った。村が出来て、まだ10年目ぐらいのことだったと思う。

米を作るため、日本で2番目に広い八郎潟を干拓して巨大な田んぼを作ったのだという。

子どもながらに、すごいなと思った。村が出来たことではなく、人間の手で大きな湖を地図上から消すことが出来るということに驚いた。

大潟村は日本の農業のモデルに

大潟村に農村のバイオニアをめざして入植した農民たち。だが入植六年目、国は「米は余っている」と減反を強いました。国に徹底抗戦、農機具を没収されて村を去った人、自殺者も出た。数千円円の借金を抱えながら米の市場開放反対を叫ぶ人。産直会社を立ち上げ、米粉の麵、パスタに未来をかける人など、しかし、こうした農民の悲劇をありきたりに描いた番組ではありません。局の先人二人が長期の取材で積み重ねた映像があり、自らの取材も、農民との信頼感の土壌があります。

過度の演出はいらない、大切なのはたゆまざる取材の集積です。

GALC選評も「今も最初の理想を追い求め、情熱を持ち続ける農民の逞しさを描き、大潟村に生きる農民たちを取材し続けた年月の重さが生み出した映像です」と継続取材の成果を評価しています。

(編集委員会)

なる村で、農家の皆さんが頑張っておいしい米を作っているのですと教わった。それは誇らしいことだった。

『モデル』と聞くと、なぜか人は良いイメージを持ってしまふ。選りすぐりの農業のプロが集まって、すごい米を作っているに違いない。広い農地を与えられて、思うままに米を育てているのだろう。



村の入植者訓練(1966年)

大潟村の農民が所有する田んぼの広さは、日本の農家の平均値の7倍以上だとも聞く。

もしも全国の農業情勢が悪化して他の地域の農家が苦境に立たされたとしても、『モデル農村』である大潟村だけは国が必ず助けてくれるに違いない。なにせ、この村は戦後の食糧不足を救うために、国

が巨費を投じて作ったのだから。親方日の丸、国という後ろ楯があれば、大船に乗ったような気分になるのは、なぜだろう。

村の真実を探して

ラジオとテレビの兼営局ABS秋田放送はテレビ放送を開始して50年あまりになる。

秋田県内の民放の中では一番古くから地域の情報を発信しているテレビ局だ。

古い我が社の中でも旧館と呼ばれる場所に『資料室』という部屋がある。昔のスタジオだったスペースに50年間の映像記録を保管しているのだ。資料室は窓が一つもなく昼でも薄暗い。

私がこの資料室に通うようになったのは2年前の冬から。日中は通常業務に追われているため、資料室に向かうのはいつも夜中だ。膨大な映像記録の中で、一番場所をとっているのが農業に関する棚だ。ABSでは農民に密着した形のドキュメンタリー番組を、これまで20本以上制作している。夜中の資料室通いの目的は、その素材一つひとつに目を通すため

だ。

戦後の食糧不足を補うために作られたはずの大潟村だったが、村が出来て、わずか6年で、国は「米は余っている」と農民たちに減反を強いる。この減反政策が農民たちの不幸の始まりだった。

その政策が、一昨年の政権交代で有名無実化(減反するかどうか



国の減反調査(1970年)

はそれぞれの農民の判断に委ねられる)するという。

この機会に、村の40年をまとめてみないか。大潟村を20年余りにわたって取材してきた先輩プロデューサーの提案だった。

素材の熱

資料室で初めて見たのが、国の役人が農民に減反を迫るシーンだった。キャプションをみると今から30年前の映像。見始めて1分で釘付けとなった。やりとりに圧倒された。「米を作るために全てをなげうってこの村に来たのに、なぜ減反しなければならぬのか」、役人に食ってかかる農民。対する役人は「まわりがみんな守っているのだから…」の一点張り。農民の主張が理にかなっているのは明らかだった。なにやらおかしなことが、当時の日本で起きている。その後見た映像も、私の知らない強烈な村の真実ばかりだった。減反に従ったものの、畑作に失敗して多額の借金を背負い、自ら



出穂前の青田刈りの光景

命を絶った村人たち。そして残された遺族にさらなる減反を迫る国の担当者。国の定めた基準をわずかに上回っただけで、青いまま稲を踏みつぶされ、村を追われた農民もいた。

遠い昔の話ではない。1970年以降の日本で実際に起きていた出来事だ。

ドキュメンタリー番組を作るうえで、重要なことの一つが『素材の温度』であると思う。特にテーマが大きければ大きいほど、取材する側にモノを伝える熱がないといけない。資料室で私が出会った過去の映像は、どれも熱かった。



大潟村第3次入植者

いま何をしているのだろうか。孤高の農民

秋田市から車で北へおよそ1時間。大潟村は、変わった村だ。村の中心に村人が暮らす居住区があり、その周りに農機具を格納する倉庫群、あとはすべて農地だ。

入植時に割り当てられた農地をそれぞれ15ヘクタールずつ所有し(その後の農地売買によってこの割合には個人差がある)、米作りの季節になると農民は朝早く軽トラソクで田んぼへ出勤。日が暮れる頃に居住区へ戻る毎日だ。

JR山手線の内側のおよそ2・5倍の広さだが、広大な農地には



米農家の坂本進一郎さん

これといった目印はない。取材対象者の田んぼに迷わず行き着くことが出来るようになるまで、1カ月ほどかかった。

大潟村は村民を試験で選んだ特異な村だ。倍率10倍の難関をくぐり抜けて入植したとあって、農業に対する村民の意識はものすごく高い。そして全てを捨ててこの新生の大地に入植しただけに、慣れ合いのような村意識は薄く、誰もが孤高なのだ。

取材に通ったのが、第3次入植者・坂本進一郎さんの田んぼだ。私が初めて見た映像の中で坂本さんはまだ20代の後半。物静かだが、減反を強要された時はコンバインに白旗を掲げて稲を刈るなど、当時から『意志ある行動』を貫く農民の一人だった。

農業に疎い私など相手にされないかと思いきや、わかりやすく教えてくれる。

坂本さんはこととして70歳。「農民っていつても俺だって米作りはまだ40回しかやってねえからな」、奥さんのみほ子さんと二人三脚ですすめる坂本さんの育苗作業は、ほのぼのとして平和に見えた。

村の田んぼに水が入り、代掻き

作業が始まる4月。坂本さんのトラクターの後ろには、カモメが山のように群がる。「貝を食いに来たんだろ」。坂本さんが泥の中からシジミをすくい上げた。



大潟村を訪れた赤松農水相(当時)

湖に作られた大潟村はヘドロ土壌で、干拓から50年がたつ今でも田んぼではシジミが採れる。

だが、湖の底だっただけに粘土質のヘドロは極端に水はけが悪く、この村では水稲以外の作物は根腐れを起こしてしまうのだ。

膝までヘドロに埋まった坂本さんがため息交じりにつぶやく。「この村が米以外だめだってことは干拓した国が一番わかっているはずなんだけどな」。

坂本さんが使っている農機具は村の干拓記念博物館に並んでいる

ような年季モノばかりだ。

トラクター前面のエンブレムは米国のメーカー『フォード』。見栄えは良いが、取材中も度々エンジンが止まっていた。国の方針にやむなく従って減反を進めてきたものの、米のかわりに作った野菜はどれもうまく育たなかった。残ったのは借金だけ。新しいトラクターなど買う余裕もなかったのだ。みほ子さんは笑いながら振り返る。「国に従わないでヤミ米を作っていたら、もう少しマシな暮らしが出来ていたかもね」これは本音だろう。

取材中に坂本さんがある唄を覚えてくれた。
入植してから8ヶ月間、入植者は村の訓練所で農業研修を受けることになっていった。その訓練所で、毎朝目覚まし時計代わりに館内に流された『入植訓練生の唄』だ。

♪北の海越え南から

選ばれてきたパイオニア
新生の土 稔るとき

我がユートピア作られる

厚いヘドロもなんのその
日本農業の黎明だ

心が躍る 我ら訓練生

夢と希望を胸に村に集まった農民たち。坂本さんがいまも時々この唄を口ずさむのは、あの頃の大きな夢を、忘れられないからだろう。



産直米を発送する坂本夫婦

しかし坂本さんが40年間ヘドロと格闘している間、国は日本の農民に減反を迫る一方で、余っているはずの米を海外からどんどん輸入してきた。

そして政権が代わったいま、TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）に見られるように、新政権も更なる貿易の自由化を検討している。国の方針をやむなく受け入れてきた坂本さんに残されたのは、結局莫大な借金だけだった。

大潟村農家の経営は、坂本さんのような一次世代から今ではその

息子の二次、三次世代へと移っている。



岡田元外相に嘆願書を渡そうとする坂本さん

東京・渋谷からギャルと呼ばれる若い女性が田植えにやってくる『渋谷米』なる商品が販売される時代だ。その一方で国のモデル農村と謳われながら、経営に行き詰まって田んぼを手放す農民が後を絶たない大潟村。

平成になっても米作り農家の苦しい現実が変わっていなかった。他の地域の農家より生産環境が恵まれていると言われるこの村で米作りをあきらめる農民が後を絶たないのであれば、この日本のどこで我々の主食である米を作るといふのだろう。

あと10年もたたないうちに、日

本の米作り農家の平均年齢は70歳を超えてしまう。農業の危機は、もちろん我々の食の危機に直結している。



米の産直を行う大潟村の会社

次の世代へ

番組の放送を終え、様々な方から感想をいただき。何より東京の若い視聴者の方から、「日本の米作りの真実を知ることが出来た」と言われることが作ってよかったな〜と思う瞬間だ。

ローカル局ではドキュメンタリーの制作環境が年々厳しくなっている。

今回の番組は1970年〜1990年〜2010年と、歴代3人のディレクターがなんとかバトンをつないで作り上げたものだ。

そのバトンはいま私の手の中にある。大潟村の農民が次の世代へ米作りを引き継いでいるごとく、ドキュメンタリーの面白さを伝えていかなければ…。



村で40年米を作る坂本夫婦

ディレクターの石川岳は、ギャラクシー受賞の席で次のように語った。

「大潟村では今年も田植えが始まった。去年同様、春先の気温が低かったため、苗の育ちがあまり良くないという。」

放送後もお世話になっている坂本進一郎さん。最近になって娘婿が米作りに本腰を入れ始め、後継者ができたと喜んでる。

大潟村の田んぼはとにかく広い。坂本さんが植える苗の軌跡はいつも大きく曲がってしまう。

「まっすぐ植えたつもりでも、振り返ると結構まがっているんだよ」

な」。不恰好にうねりながら、それでも大潟村の米作りは今年も途切れず続いている。

悩みながらも物作りを続けることの大切さを教えられた気がして、はっとなる。

資料 秋田放送 放送批評懇談会

後藤会長に志賀信夫賞

第48回ギャラクシー賞

この賞は志賀信夫氏の放送批評活動の功績を記念して創設され、放送文化、放送事業の発展に顕著な貢献をした個人を顕彰するもの。

後藤会長は、日本のFM放送の発展に貢献しただけではなく「見えるラジオ」の開発やMXTVの再建にも手腕を発揮、こうした多方面の活躍が賞に値するとされた。ご本人は「皆さんのおかげで好き勝手にやらせていただいた。そのうえにこのような賞をいただき、とても感謝している」と受賞の弁を語り、ラジオの未来については「インターネットやデジタルなどテクノロジーの発展と調和をとると同時に、ラジオの持つ創造性を大事にすることが重要」とラジオへの思いを熱く語った。

(『GALAXY』8月号から)

風

倖せも 不幸に

不幸も 倖せに

風の吹きよで

世の中変わる

空気は見えない けれど

風として感じる事が出来る

風は空気の運動

見えない空気にも重さがあり

熱で堆積が変わるため移動する

また物体が動いて風をつくる

風は人に優しく 人に厳しい

風は香りを運び 黄砂も運ぶ

風は砂丘に芸術を残し

大木を根こそぎ倒す

風は水面にさざ波を輝かせ

時として大船を覆えす

風は物にふれて楽器とし

振動を与えすぎて破壊もする

目には見えないけど存在する風

私たちの周りには見えないけど存在することがたくさんある

見えないものを見るとはどういうことか

無いものと有るものとの違いはどこか

近頃 私は物の存在することが不思議に見える

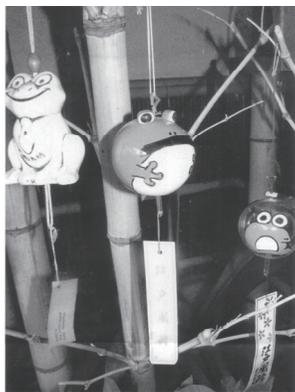
西ふけば 東にたまる

落ち葉かな

写真と文

松田昭男

(SBS)



写真と文

松田昭男

(SBS)

会報『民放しずおか』第64号より